

香港トレイル

アルパインツアー

2～5日



香港といえばまずこれである、街いっぱいにあるれるがごとくそびえ建つビル郡と 2 階建てのバス。香港の山に行くというと必ず聞かれる。“香港に山なんてあるの？”、一応はある。高いのは鳳凰（ランタオ）山(934m)というのがあるが、今回はそれさえ登らないで、香港にくまなく張り巡らされたトレイルというやつの内のいくつかを巡るというツアーである。イギリス統治時代にこのトレイルは作られた。500m毎に距離表示があつて道はかなり良く整備されている。

香港に着いてホテルにも寄らずにすぐに、世界三大夜景（香港・長崎・モナコ）が見られるという扯旗山（ビクトリアピーク）に向かう。ここには香港トレイルというこの周りだけを 1 週できるコースが作





家族連れなどで溢れかえる香港トレイルとトレイル標識

られていて（全長は 50km）、たまたま日曜日であったので家族連れやボーイスカウトだったので溢れかえていた。道は全面的に舗装されており、自然に生えている木々でさえ人工的に見えてしまうところは香港らしいという表現ができる。

香港は、東京の山手線内の面積と同じくらいの広さのところに 700 万近くの人がいるということなので、とにかく居住区には建物が目一杯建っている。だからグランドなどというものはほんの少ししかなく、学校でさえビルの中であるという。したがってこのトレイルが数少ない運動の場になるのであろう。

2 日目からは本当のトレイルに入る。香港トレイルに対してカントリートレイルと名付けられている。ガイドには「香港アルプス」という著作もある、香港在住 1/4 世紀に及ぶという森久（モリキュウ）さんという女性がつく。今回の客は、女性 3

人に私の合計 4 人であるから、アルパインの伊藤勇太郎さんと香港人女性ツアーコンダクターのジュディさんなどを加えるとスタッフが 3 人である。つまり女性 5 人に囲まれてのハイキングである。この日は釣魚翁(英名ハイジャンクピーク)を中心にして北から南への縦



釣魚翁から漁港を見下ろす



全オバサン連合と

断である。舗装は無いので、道は粘土状になっていて小雨交じりのこの日は歩きにくい。しかしせいぜい300mチョイの山であり、道そのものはしっかりしており、苦勞することは無いはずだがなぜか苦勞した。

午後は、香港島に渡って龍背（ドラゴンズバック）を2時間ほど歩く。「小心行人」（歩行者注意）などの標識も頻繁に見受けられる。



注意の標識



シンフォニーオブライツ

夜は広東料理の後で、シンフォニーオブライツである。夜空いっぱいに流れるシンフォニーに合わせてレーザー光線が多数のビルの頂部から断続的に放たれる。この夜はモーツアルトのアイネクライネナハトネジークのリズミカルな曲に乗ってレーザー光線が跳ね回った。この曲はホテルのBGMなどで何回か聞いた。香港人の好みなのかもしれない。この会場にはブルース



ブルースリー像

リー像や道に貼り付けられた有名人の手形などもある。

第3日目は今回のトレイルの中で一番長い行程の日であるということで、朝5時にホテルを出た。朝食はバスの中で各自取る。香港のトレイルでは至るところで綺麗な屋根のついた休憩所に出会う。必ずトイレも近くにある。

ジオパークから始まるマクリホーストレイルを歩く。最初は



六角柱状節理



香港のモルディブ



休憩所

巨大な六角柱状節理がある破邊州（ポーピンチャウ）から始まる。この日の最高峰の西湾山（サイワンティン）は314mであるが、香港のモルディブと呼ばれる海水浴場から登り始めるのであるのでモロに全部登ることになる。まあ、3日目になったのでみんなも打ち解けてきてバカ話をしながら歩いているうちに山頂に着いてしまったという感じである。午前中は歩きづめで昼飯は2時くらいになると脅されていたが、1時間ほどチョンゴ道の選択をしたこともあって12時台には昼飯にありつけた。昼食は海鮮料理である。漁師町全体にカニ、エビ、ホタテやシャコ



西湾山山頂

などが目一杯に並んでいる。日本であれば生き造りということであるが、中華料理には刺身のような食べ方はない。全て火が通っているが、やはり新鮮であるということは味を引き上げる。しかし、日本的な言い方をすれば“漁師料理”的な食べ方であり、フンドシにハンテンであれば豪快に食べることもできるであろうが、着ているものを気かけながらであると、味わっている余裕がなく、せつかくの料理が意識の外で処理されてしまう。

午後は土産物あさりで街へ出る。ホテル“**The Peninsula**”で一粒 500 円以上というチョコレートやスーパーでプーアール茶などをゲット。

この日の夕食は北京料理である。北京ダックやふかひれスープ他で盛り沢山だ。おかげでダイエットどころかまた太ってしまった。



海鮮料理の店先



ラマ島への連絡船



パパイヤの実



ラマ島の養殖

最終日は日本に帰る日であるが、午前中はラマ島（南Y島と書く）のハイキングがついている。香港は台湾と同じような緯度に位置するので亜熱帯になる。香港の本島などでは見かけなかったバナナやパパイヤなどもたくさんあった。なんの種類だか判らないが魚の養殖の仕掛けも海上に浮かんでいる。森久さんの話によると、香港では食料品の 99%が島外からの輸入であるという。結構安全安心な日本産野菜なども好まれているようである。



連絡船からの香港の街

香港がイギリスから中国に返還されたときの中国の最高実力者の鄧小平は、卓越した現実主義者で、一国二制度などという言葉を作り出して、向こう 50 年間は現状を守ると決めて香港の中国化を実現した。資本主義に慣れきった香港人をいきなり社会主義に組み込もうとしても無理だということがわかっていたからだ。世界中どこに行っても北京語を話す中国人はすぐ判る。独特の甲高い声が響き渡るからだ。しかし香港ではその甲高さも無く、きわめておとなしい。北京語の“ニーハオ”に相当する言葉は広東語では“ジョーサン”である。トレイル中に“ジョーサン”と声をかけると“ジョーサン、ジョーサン”と返してくれる。中には“こんにちは”とニコニコしながら言う人もいる。最近の日中関係からは考えられないことだ。広い中国にはこんなところもある。もっとも北京に行ったって、個人個人で話せばいい人は一杯いるはずで、マスコミが流す悪い話ばかりではないはずであるが。

前回の知床へ行ったときには、羽田までの電車が遅れてひやひやした。今回は成田集合が 7 時 10 分ということで、二駅先までタクシーを使わなければ間に合わなかった。その予約したタクシーが来なくてあせった。ヒデエ無責任なタクシー会社もあったもんだ。